

建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の 生涯と作品(その2)

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

本誌前月号(2015年2月号、Vol.41、No.475)で建築家エルンスト・マイの生涯と作品(その1)を報じた。エルンスト・マイは生誕地フランクフルト、シュレージエンのプレスラウ、モスクワ、東アフリカ、ハンブルグ、そしてダルムシュタットと各地を転々として大活躍した建築家であり、都市計画家であった。本稿では第一次世界大戦と第二次世界大戦とのほざまであるヴァイマル共和国時代にフランクフルト・アム・マイン(Frankfurt/M.)^{註1)}に多くの団地(ジードルング)を手掛けた当時に焦点を絞り解説を行う。これは1925年から1930年までのわずか5年間であるがマイの最も充実していた時代と言っても過言でない。

1. フランクフルト

『アルプスの少女ハイジ』は、スイスの作家ヨハンナ・シュピリ(又はスピリ)の児童文学作品である。1880年から1881年に執筆された。原題は『Heidis Lehr- und Wanderjahre』(ハイジの修行時代と遍歴時代)及び『Heidi kann brauchen, was es gelernt hat』(ハイジは習ったことを使うことができる)という。

ドイツの文豪ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』及び続編の『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』からその着想を採られたもので、教養小説(成長小説)としての色彩を持ったものである。キリスト教信仰に基づく描写が多く見られる。作者も属するドイツ語圏スイスの山村が舞台となっており、後半にはゲーテの生誕地でもあるフランクフルトに舞台が移る。

フランクフルトは正確にはフランクフルト・アム・マイン、マイン河のほとりのフランクフルトという。マイン河はこの町の少し下手、マインツでライン河と合流する。ドイツ中央部の要路をおさえて商業の都として栄えてきた。前号で記述したようにドイツの中央銀行であるドイツ連邦銀行(ドイツ語: Deutsche Bundesbank, 通称

ブンデスバンク)がある。これは連邦政府直属の法人である。そして間接的ではあるが行政機関にも位置づけられる。欧州中央銀行もこのフランクフルトにある。したがってドイツの大銀行の本店はフランクフルト・アム・マインにある。この町にユダヤ系ドイツ人でマイヤー・アムシェル・ロートシルド(Meyer Amschel Rothschild, 1744~1812)という男がいた。ユダヤ人のガッセに住んでいたが、金融業で財産を築いた。ヘッセン公にまで金を調達し、金庫をまかされるまでになった。金貸し業者は戸口に赤い(ロート)標識(シルト)を付ける習わしがあった。ロートシルドとはこれからつけられた苗字である。息子たちをフランクフルト、ロンドン、ナポリ、ウイーン、パリ、などへ散らばせ、それぞれ大成功をおさめ、それぞれ大富豪になった(図1)。英国へ渡ったナタン(Nathan Mayer Rothschild, 1777~1835)は兄弟の内でも最も優れ、大富豪、大実業家となった。英国ではロートシルドの英語読みロスチャイルドを名乗った。1815年にナポレオン軍がワーテルローでプロイセン・イギリス連合軍に敗れた。ロートシルドは伝書鳩を使用して他の金融業者より先にナポレオンの敗北を知った。そして英国ポンドを購入し、反ナポレオン連合軍に貸し付けた。配当金はロンドンで支払うようにし、英国シティの元となった。

日本も日露戦争(1904~1905)で勝利し、大国入りを果たしたが、この時の戦時資金調達に当時の日銀副総裁であった高橋是清はロンドンへ飛びロスチャイルド父子銀行から融資を受けている。

ロートシルド家の元祖マイヤー・アムシェル・ロートシルドは亡くなる時(1812年)に5人の息子を枕元に呼び、「矢は1本、1本では簡単に折られるが、5本束ねれば決して折られる事は無い、兄弟は仲良く協力し合って行け」と諭し、兄弟はそれを守り繁栄を築いたとフランクフルトのユダヤ博物館^{註1)}の案内学芸員から聞いた。この話、わが国では毛利元就が臨終に際し(1571年)隆元、元春、隆景の3人の息子を枕元に呼び3本の矢を示し、結束を求めた話と酷似している。ロートシルド家の方はロスチャイルド父子銀行のように社章に束ねた5本の矢を



図1 ロートシルド(ロスチャイルド)家の5兄弟¹⁰⁾



図2 5兄弟の母親グートル・ロートシルド(Gutle Rothschild)¹⁰⁾

用いているものが多い。マイヤー・アムシェル・ロートシルドの妻グートル・ロートシルド(Gutle Rothschild, 1753~1849)は96歳まで生き、生まれたユダヤ人ガッセを離れることなく、小さな家に住んでいた(図2)。世界の各地に散り大富豪となった息子たち、孫たちをこのガッセの小住宅に呼び、家族の祝いを行ったという。ロスチャイルド家は世界を牛耳る巨大財閥となったのである。キリスト教は他人に金を貸し利息を取ることは禁じていたので、金融業には向いていなかった。その結果ユダヤ系大財閥は巨額の富を得たが、これに反感を抱く人も多かった。その心理をうまく利用してナチスは正式な選挙で得票を伸ばし、ついには政権を取るに至った。反ユダヤ感情が抱かれる背景にはユダヤ人はかつてキリストを処刑したきっかけを作ったとしてキリスト教徒から憎悪の対象とされて来たという事もある。

アルプスの少女ハイジがアルプスから出てきて縁あって、フランクフルトの高級住宅に住む。この娘クララの父親は銀行業で普段は家にいないという設定もフランクフルトは金融の町であることを象徴している。

2. エルンスト・マイとフランクフルト

前報で報じたようにエルンスト・マイは1886年にフランクフルトで生まれている。

1925年から1930年の間わずか5年であるが、エルンスト・マイは充実した仕事を出身地フランクフルトで行うことが出来た。マイは絵画の才能があり、多くのスケッチを残している。画家はアトリエで自分の思うままに絵筆をふるうことが出来る。建築家の仕事には発注者の意向が強く影響する。発注者が建築家の提案を理解してくれないと仕事は進まなくなる。エルンスト・マイの場合、社会主義者のルードヴィッヒ・ランドマン(Ludwig Landmann)²⁾が選挙で市長になったところであった。エルンスト・マイは英国滞在中にレイモンド・アンウインの社会主義思想に共感し、アンウインのもとで田園都市の計画手法を習得していた。このような事から市長ランドマンとは息が合った。ランドマン市長も社会民主党(SPD)、民主党(DP)、中央党(Z)の支持を得て当選している。そして公約であった住宅政策の策定、貧困住宅の整理と新しい集合住宅の建設に取り組む必要があった。この目的に最適な建築家とされたのがエルンスト・マイであった。しかしランドマン市長はマイ一人に都市計画、

表1 エルンスト・マイがフランクフルトに造成した主なジードルング²⁾

ジードルングの名称	地区の名	建設年	住戸数	面積
ブルッフフェルド Siedlung Bruchfeldstrasse	ニーダーラッド Niederrad	1926-1927	643	4.9ha
ブラウムハイム Siedlung Ptraunheim	ブラウンハイム Praunheim	1926-1929	1,500	29.9ha
ボルンハイマーハング Siedlung Bornheimer Hang	ボルンハイム Bornheim	1926-1930	1,234	15.4ha
レーマーシュタット Roemerstadt	ヘッデルンハイム Heddenheim	1927-1929	1,220	28.0ha
ハイマート Heimatsiedlung	ザクセンハウゼン Sachsenhausen	1927-1934	1,072	10.4ha
ヴェストハウゼン Siedlung Westhausen	ブラオンハイム Praunheim	1929-1931	1,116	20.1ha
ヘラーホーフ Hellerhofsiedlung	ガルス Gallus	1929-1932	1,200	15.6ha
合計			7,985	124.3ha

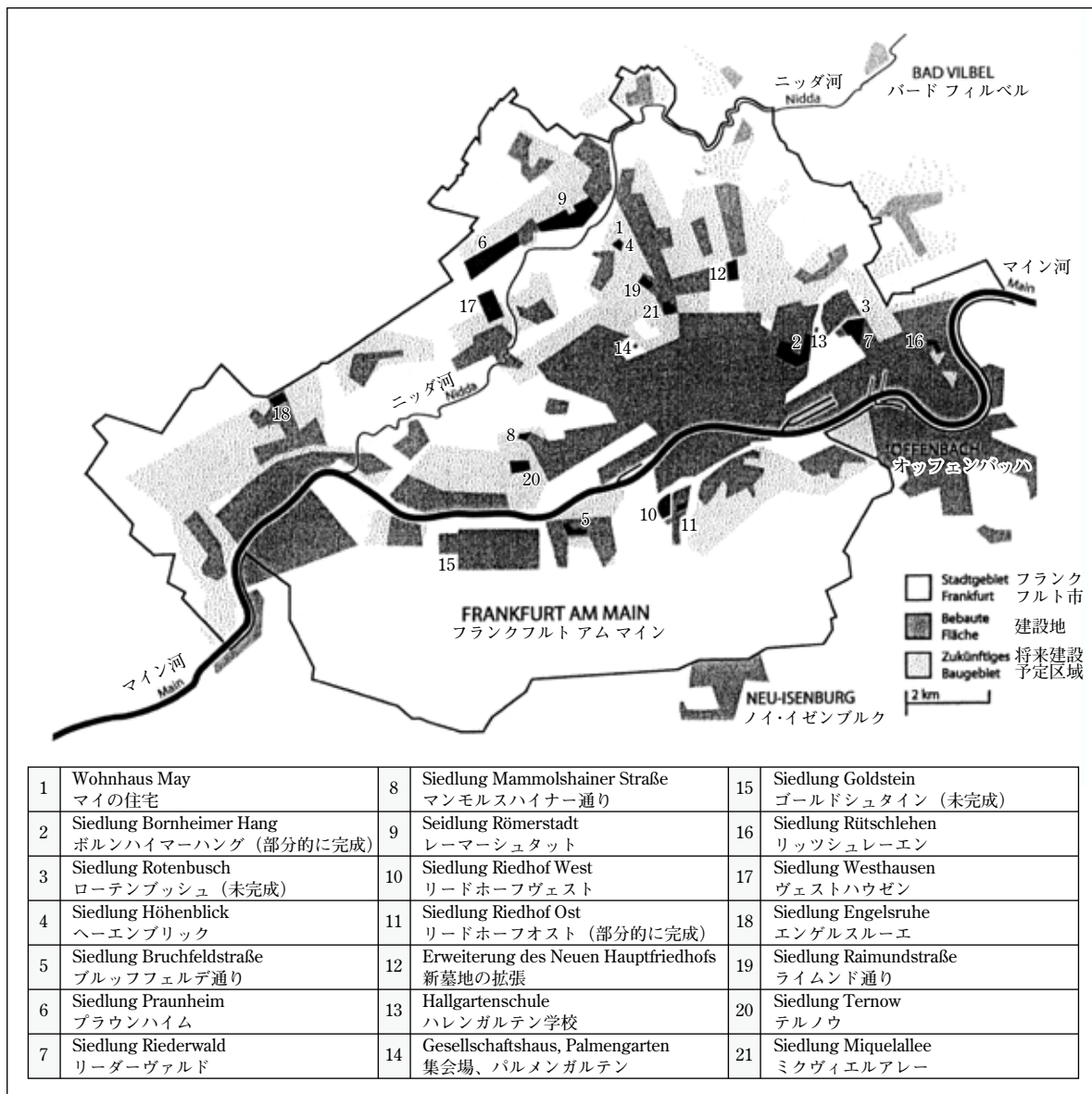


図3 フランクフルトにエルンスト・マイが展開したジードルングの所在地²⁾

住宅計画を任せただけではなく、もう一人マルチン・エルゼッサー (Martin Elsaesser) という建築家にも任せていた。二人の指導者により新しいフランクフルト計画が行われた。エルンスト・マイが1926年から1932年の間にフランクフルトに造成した主なジードルングを表1に示す。1933年にはナチス政権が樹立し、その年にマイはモスクワからイタリアのジェノバ経由で東アフリカへ渡り、亡命している。フランクフルトにマイが展開したジードルングの所在地を図3に示す。

3. ニーダーラッド (Niederrad) の集合住宅

この集合住宅にはフランクフルト中央駅から高架鉄道のS8もしくはS9に乗り、ニーダーラッド (Niederrad) 駅で下車、路面電車の15番線に乗り換えハールドヴァルトプラッツ (Haardt Waldplatz) で下車すると良い。

エルンスト・マイが1926年から1927年にかけて設計、完成させた集合住宅である。図3においてこの集合住宅は5番目のブルッフフェルデ通り (Bruchfeldstraße) の

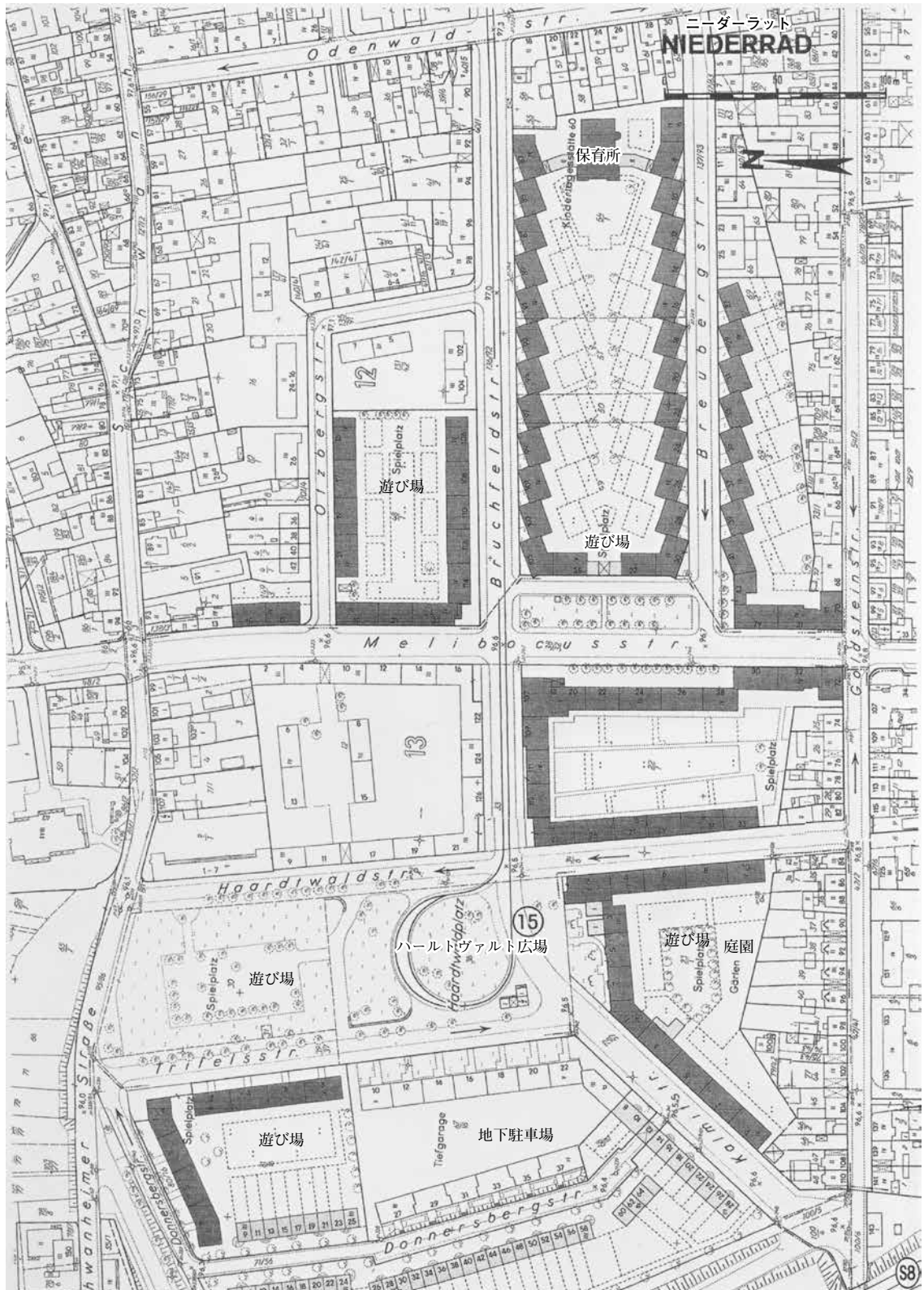


図4 ニーダーラットの集合住宅敷地配置図²⁾

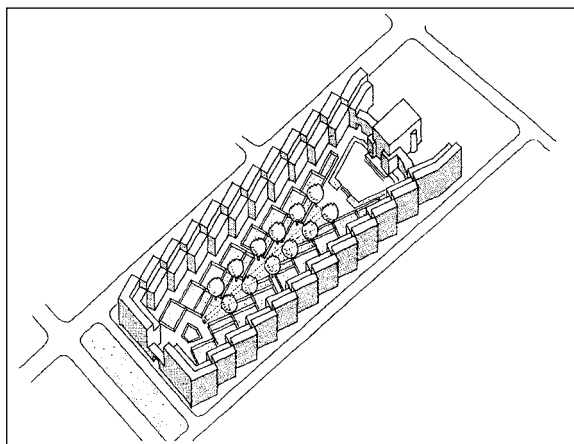


図5 ジグザグ住宅のアイソメ図²⁾

集合住宅となっている。これはこの集合住宅の一面が面する道路がブルッフフェルド通りと呼ばれている事による。建築主は小規模住宅株式会社(Aktiengesellschaft für kleine Wohnungen(ABG.))である。ここでは654戸の賃貸住宅が計画された。(表1では643戸となっている)^{註3)}内訳は一世帯用独立住宅が49戸であった。3階建て、5部屋あり、1戸の延べ床面積は107m²であった。一部屋住宅(ワンルーム)が5戸あった。また延べ床面積56m²の二部屋住宅が177戸、延べ床面積65m²の三部屋住宅が318戸、延べ床面積、90m²の三室住宅が91戸、延べ床面積105~115m²の四室住宅が14戸あった。全ての住宅に浴室、フランクフルト厨房(後述)、中央式暖房、中央式放送、屋根裏部屋、全てではないが、多くの住宅に庭園もしくは屋上庭園が設備されていた。ジードルングとしては多くの商店、図書館、託児所、幼稚園、読書室、集会場、中央放送装置、洗濯室、暖房ステーション、小学校が設置されていた。ブルーノ・タウトは同じ時代にベルリンで12000戸の集合住宅を建設した。しかし暖房はダーレピッツの自宅では中央式温水暖房を設備したものの、それ以外はカッヘルオーフェンと呼ぶ暖炉によっていた。当時のフランクフルトが如何に進んでいたかをうかがわせるものである。小形の地域暖房が設備されていたのである。ここでは特にブルッフフェルド通り(Bruchfeldstraße)とプロイベルグ通り(Breubergstraße)に面するジグザグ住宅が有名である。この敷地計画を図4に示す。このアイソメ図を図5に示す。このアイソメ図を見ると集合住宅はV字型のようにも見える。このV字の頂点の部分は子供室、ホール、集会室、読書室、事務所、さらに屋上庭園などの公共の部屋となっている。この配置を図6に示す。

318戸建設された65m²の住宅が一番多い。この住宅の1,2階の平面図を図7に示す。最上階は屋根裏部屋が多く一部屋上庭園となっている(図8)。断熱と防水はこの階の床に施されている。原設計では屋根には断熱は施されていない。単に雨を防ぎ、夏の強い日差しを防ぐ傘のような役割を果たしている。屋根裏部屋は冬寒く、夏は暑い空間となる。従って普段使用しない物品の収納や洗濯物干場として使用されている。ドイツでは洗濯物を庭先やベランダで干すことは美観の観点から禁止されている。屋根裏部屋は窓を開ける事で自然換気を行うことが出来る。これがオリジナルの設計であったが、最近では屋根裏部屋を改修し屋根に断熱を施し屋根裏部屋を居室に改修し、居室として使用する場合もある。ニーダーラッド(Niederrad)地区のエルnst・マイ設計による集合住宅を写真1~10に示す。やはりブルッフフェルド通り、プロイベルグ通りのジグザグ住宅は圧巻である(写真6~9)。特にプロイベルグ通りに沿って歩くと両側にジグザグ住宅が展開され、おとぎの国を歩いているような錯覚に陥る(写真7)。長方形の住宅でもマイは隅角部の部屋に赤みがかった柿色に着色した円形のバルコニーを設けている(写真2、写真4)。天気の良い日にこのバルコニーでの語らひはロマンティックなものを感じる。ここでこの集合住宅の窓に用いられている水切りを写真10に示す。ドイツでは水切りを常にかかなりの幅で外壁表面よりも外に出す。こうする事で、水切りに降雪があっても、溶けた水を外壁内に侵入させないように配慮している。わが国でも外断熱工法が用いられる事が多くなっているが、この水切りが外部に飛び出していなく外壁表面と面一になっている場合がある。このような場合水切り上の雪が溶けだすと外壁の中に水が浸入し断熱材を湿潤にしてしまう事がある。注意を要する事である。



写真1 ニーダーラッドの長方形集合住宅

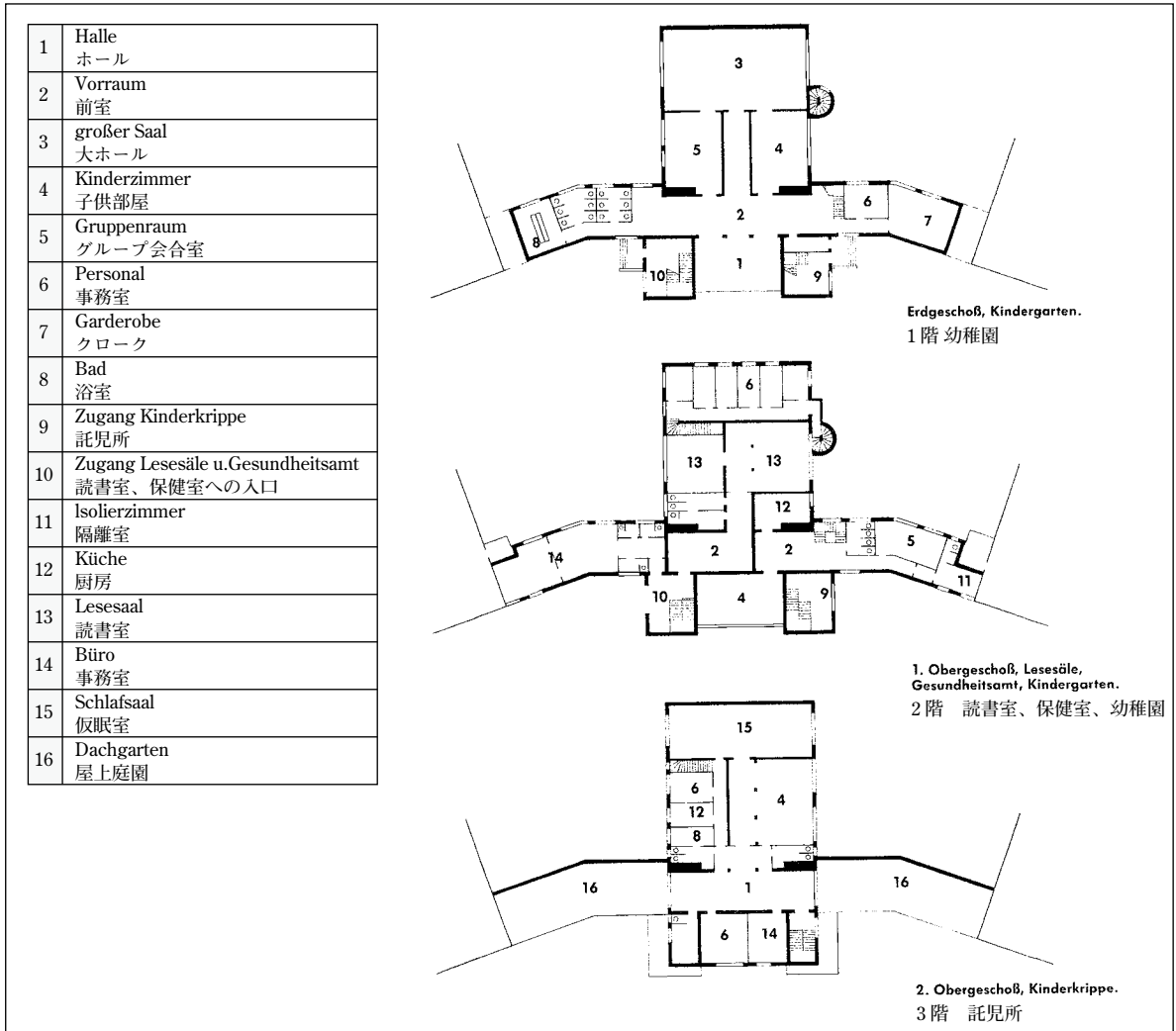


図6 ジグザグ住宅の公共施設部分平面図²⁾

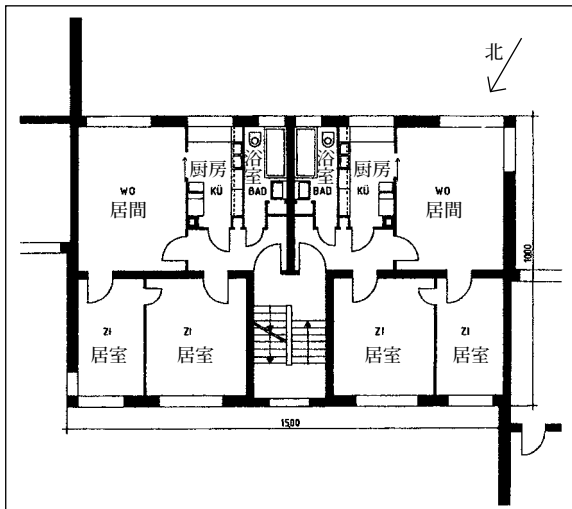


図7 65㎡ジグザグ住宅の1,2階平面図²⁾

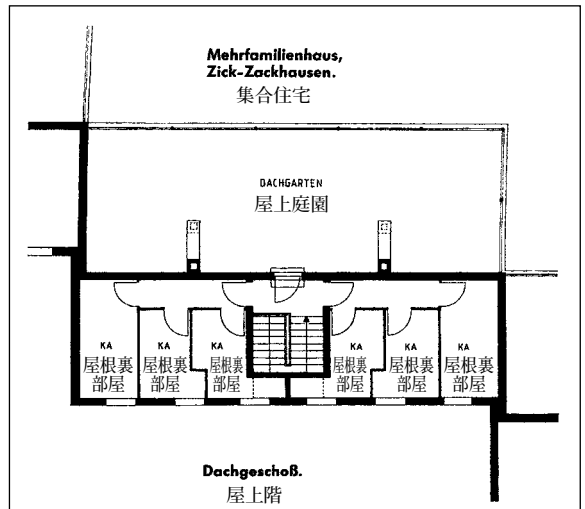


図8 65㎡ジグザグ住宅の最上階平面図²⁾



写真2 ニーダーラッドの長方形集合住宅(隅角部の部屋に円形のバルコニーがある)



写真3 ニーダーラッドの長方形集合住宅(庭園側)



写真4 ニーダーラッドの長方形集合住宅・バルコニー



写真5 青い色を用いたニーダーラッドのジグザク集合住宅



写真6 ニーダーラッドのジグザク集合住宅



写真7 ニーダーラッドのジグザク集合住宅



写真8 ニーダーラッドのジグザク集合住宅



写真9 ニーダーラッドのジグザク集合住宅



写真10 ニーダーラッドのジグザク集合住宅の窓に付けられた水切り

マイが勤労者の健康に配慮し、フランクフルトに集合住宅を展開したのは1920年代、ドイツのヴァイマル共和国時代である。これが現在の集合住宅の良い見本となった。

4. エルンスト・マイ・ハウス

図4 ニーダラッドの集合住宅にルンスト・マイ協会がエルンスト・マイが設計をした集合住宅の一住戸を展示用に使用し、一般公開を行っている。これをエルンスト・マイ・ハウスと呼んでいる。住所はIm Burgfeld 136, 60439, Frankfurt/M.であるが、見学には事前申し込みが必要である。ニーダーラッド内のジードルングにはエルンスト・マイ・ハウスの所在を示す標識が立っている(写真11)。マイ・ハウスに入ると食器戸棚(写真12)、机、椅子など当時のものが陳列されている。エルンスト・マイは1926年にオーストリアの女流建築家マルガレーテ・シュッテ・リホッキー(Margarete Schütte-Lihotzky, 1897~2000)と共に厨房の近代化を図るべく研究を行った。家事労働の行動を写真撮影し、分析を行い、これを基にして合理的な厨房設計を行った。これをフランクフルター・キュッヘ(Frankfurter Küche: フランクフルト厨房)と呼び主婦の家事作業の労働削減に寄与した。当時は勤労者階級でも女中を置き家事を分担させた。それほど主婦の家事労働は大変であった。マイとリホッキーは主婦一人で調理ができる事を考えた。同じ厨房ユニットを大量生産させ価格の低減を図った。これがシステムキッチンのはしりとなった。マイのこのような努力で勤労者階級でも住宅が手に届くようになった。ちなみにベルリンで大量の集合住宅を建設していたブルーノ・タウトも1929~1930年にかけて建設したイデアールジードルン



写真11 エルンスト・マイハウスの所在を示す標識



写真12 マイ・ハウスの食器戸棚

グ(所在地: Berlin Bitz, Buschrosenplatz, Franz Körner Straße Rungiusstraße)の集合住宅でフランクフルト厨房のシステムキッチンを採用している。⁵⁾フランクフルト厨房は住宅自体が勤労者を対象とした狭いものであるので、1.87m×3.44mすなわち床面積6.43m²という狭いものである。

フランクフルト厨房の調味料等収納容器棚を写真13に示す。リホッキーは自らの経験を生かし厨房の近代化に努力した。従来は単に食料棚があり、そこに調味料など



写真13 フランクフルト
厨房の調味料等収納容器
棚



写真14 調味料等
収納容器の構造

を保管していたが、塩、砂糖、小麦粉、カタクリ粉、ピスタチオ、レーズン、木の实、リンゼンと呼ぶ豆類等を分類して保管する容器を開発し食器棚に作り付けとした。かつ一つ、一つの容器は最後まで保管物を取り出せるように四角ではなく、底部に曲線を与えた(写真14)。写真15に厨房の写真を示すが、向かい側は配膳台、右は下部が収納庫となっているシンク、左に調理用のレンジ、調理用電気プレートがある。1920年代のものであるので、当然IHクッキングヒーターではなく、ニクロム線加熱のプレートである。調理時に主婦が腰かける丸型の椅子は回転できるようになっている。写真16に当時の居間を示す。現在は事務室として使用されている。写真17は階段室の廊下と2階へ昇る階段である。写真18は厨房の収納棚である。写真19は調理用の電気オープンである。写真20は調理に用いる鍋の収納庫である。写真21は居間から住宅附属の庭、さらにこの集合住宅に並行する先方の集合住宅を見たところである。写真22は厨房の食器棚、シンクと調理台で、この下に収納庫がある事を示している。このように棚類は天井まで作り付けとなっているので収納スペースも十分である。調理台ではまな板代わりに使用するプレートが引き出しのように出てくる構造となり、スペースを節約して使用できる工夫がなされている。このように比較的狭いスペースの厨房を主婦の動線を配慮し有効な空間とした。写真23は折り畳み式の作業台である。折り畳み式とすることでスペースの節約をはかった。この作業台はアイロン台としても使用された。当時はノーア



写真15 厨房



写真16 居間



写真17 階段室の廊下と2階への階段



写真 18 厨房収納棚



写真 19 電気式調理プレートと電気オープン



写真 20 調理用鍋の収納庫



写真 21 居室から付属の庭園、さらに先方の集合住宅展望



写真 22 食器棚とシンク(引出状のプレート)



写真 23 折り畳み式作業台(アイロン掛けにも使用された)



写真24 女中部屋のベッド



写真25 地下室へ降りる階段



写真26 浴室：バスタブと洗面器



写真27 浴室内の大便器(便座は木製)

アイロンの布地は無く主婦にとってアイロン掛けは大変な作業であった。ドイツではシーツ、テーブルクロスなど大きな布地にアイロンを掛ける作業は主婦の大変な家事労働の一つであった。調理も現在と違いニクロム線加熱の調理プレートやオープンを使用したもので自動制御装置が未発達であった。従ってジャガイモを茹でる、鶏を焼くなどの調理時には主婦は厨房に居て出来具合を監視する必要があった。このような場合に主婦はこの作業台でアイロン掛けの仕事しながら料理の出来具合を監視していたのである。この折り畳み式作業台はフランクフルト厨房の極めて特徴的なものである。また天井からの吊り下げ照明は可動式であった。このフランクフルト厨房は10000製造され、集合住宅に作り付けられ価格の低廉化が行われた。

写真24にこの住居の女中室を示す。このような勤労者の住宅でも女中を置いたようである。当時は地方の娘がフランクフルトのような大都会に出てきて行儀見習いとして女中を務めた。スイスの山からフランクフルトに出てきたアルプスの少女ハイジもそのような存在であった。ハイジは資産家の家に住み込んだという違いはある

が。

写真25に地下室へ降りる階段を示す。わが国の集合住宅では床下空間を設け、床下の換気をはかり床スラブが湿潤になる事を避ける。ドイツのような寒地では地下室を設け建物の凍上を防いでいる。この階段もブルーノ・タウトが設計する階段と比べると単純なものである。この写真の左に明かりが見えるのは地下室前にドライエリアがあることを示している。ドライエリアを設ける事で、地下室に採光をはかり、自然換気も行えるようにした。

写真26は浴室のバスタブ、洗面器を示している。浴室の中に大便器もあり、この便器で小用も済ませるので、小便器は存在しない(写真27)。日本では浴室に便器があることに多くの人々は抵抗を感じる。すなわち「ある人が入浴中に他人が便意を感じたらどうする」といった問題である。ドイツではこのようなバスタブを使用しての入浴は極めて少なく、実際はシャワーで済ませている。従ってある人の入浴と他人の便器使用が重なることは極めてまれなのである。当時の便器の便座は木製であった。当時は便座を加温するウォッシュレットのようなものではなく便座に腰かけると冷たかったので、熱を伝搬しにくい



写真28 地下室は収納庫として使用された。



写真29 エルンスト・マイハウスと付属の庭園

木製となった。我々日本人は今日ではウォッシュレットを愛用するが、ドイツでは水を使用する便座で電気を使用する事は極めて危険であるとして普及を妨げている。ドイツでは家庭用電気の電圧は200Vである。

写真28にこの住宅の地下収納庫を示す。常時は使用しない物品を地下室に保管している。以上エルンスト・マイ・ハウスについて長々と説明を行った。エルンスト・マイ・ハウスを庭園側から見た写真(写真29)をお見せして本稿を終える。

終わりに

表現主義建築の旗頭であったブルーノ・タウト、表現主義とバウハウス教育が批判されたヴァルター・グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ、母親がユダヤ人であったエルンスト・マイは極めて優れたドイツの建築家であったが、ナチス政権に睨まれそれぞれ亡命をし、祖国ドイツを去った。ブルーノ・タウトは来日し建築の仕事には恵まれなかったが、「日本美の再発見」、「日本文化私観」などの名著を残し日本人に感動を与えた。グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエは米国へ亡命し、ガラスの超高層建築を次々に設計し、それが現代建築の主流となっている。エルンスト・マイはアフリカへ亡命し、アフリカの建築、住宅の近代化に大きく貢献した。もしナチスがこの有能な建築家達を追放しなかったらどうなっていたのであろうか・保守的なドイツであるので、当時ガラスの超高層建築をドイツに建てる事は出来なかったに違いないし、多忙な建築の仕事を好んだブルーノ・タウトも著作に取り組む時間を取ることはできなかったであろう。人間万事塞翁が馬である。

〈註〉

- ユダヤ博物館(Jüdischs Museum: Untermainkai 14-15, Frankfurt/M.) ユダヤガッセの地下室などがそのまま保存されている。(写真30)
- ルードヴィッヒ・ランドマン(Ludwig Landmann, 1868～1945)はマンハイムに生まれたユダヤ系ドイツ人である。フランクフルト市長とし、フランクフルト空港を作った。南北800kmの高速道路(アオトバーン)を作りフランクフルトを交通の要所とした。さらにメイン河を利用した水路の利用に尽力した。政府出資の国策会社ルフトハンザ航空の取締役会の副会長を務めた。また文化都市フランクフルトの高揚に努めた。しかしナチスに追われ、一旦ベルリンへ逃亡、さらに夫人の出身地オランダで身を隠した。フランクフルトに帰る事を希望していたが、フランクフルトがナチスから解放される数日前の1945年に亡命先のオランダで心臓病の為亡くなった。氏のエルンスト・マイに託した勤労者の為の集合住宅造りは非常に大きな業績である。
- 調査した文献が1)と2)により、ニーダーラッドの戸数に654戸と643戸という矛盾が生じている。単なる数え間違いの可能性もある。ある住戸で借家人を住まわせることもある。このような場合本来一戸とすべきところ二戸と数えたかもしれない。真実は不詳である。



写真30 フランクフルトのユダヤ博物館、ユダヤ人ガッセの地下構造

〈参考文献〉

- Claudia Quiring, Wolfgang Voigt, Peter Cachola Schmal, Eckhard Herrel. "Ernst May 1886-1970" Prestel
- エルンスト・マイ協会(Ernst-May-Gesellschaft e.V.) 資料
- 田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト―人とその時代、建築、工芸、ホーム社
- 田中辰明 「ブルーノ・タウト・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159
- 田中辰明 「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
- 田中辰明 「バウハウス(ヴァイマル)」月刊建築上技術2014年8月号、工文社
- 田中辰明 「バウハウス(デッサウ)」月刊建築上技術2014年9月号、工文社
- 田中辰明 「バウハウス(ベルリン)」月刊建築上技術2014年10月号、工文社
- 田中辰明 「ナチス好みの建築」月刊建築上技術2014年11月号、工文社
- Helga Krohn und Annette Weber, Mayer Amschel Rotschild & Söhne, Jüdisches Museum
- 小倉欣一、大澤武男「都市フランクフルトの歴史」中公新書1203